

雪渡り

宮沢賢治

青空文庫

雪渡り その一（小狐こぎつねの紺三郎こんざぶろう）

雪がすつかり凍こおつて大理石よりも堅かたくなり、空も冷たい滑なめらかな青い石の板で出来ているらしいのです。

「堅かた雪ゆきかんこ、しみ雪しんこ。」

お日様がまつ白に燃えて百合ゆりの匂においを撒まきちらし又また雪をぎらぎら照あらしました。

木なんかみんなザラメを掛かけたように霜しもでぴかぴかしています。

「堅雪かんこ、凍しみ雪しんこ。」

四郎とかん子とは小さな雪ゆきぐつ沓くつをはいてキツクキツクキツク、

野原に出ました。

こんな面白い日おもしろが、またとあるでしょうか。いつもは歩けない黍きびの畑の中でも、すすきで一いっぱい杯ばいだった野原の上でも、すすきの方へどこ迄まででも行けるのです。平らなことはまるで一枚の板です。そしてそれが沢たくさん山の小さな小さな鏡のようにキラキラキラキラ光るのです。

「堅雪かんこ、凍み雪しんこ。」

二人は森の近くまで来ました。大きな柏かしわの木は枝えだも埋うずまるくらい立派な透すきとおった氷柱つららを下さげて重おもそうに身体からだを曲まげて居おりました。

「堅雪かんこ、凍み雪しんこ。狐の子こあ、嫁よめいほしい、ほしい。」

と二人は森へ向いて高く叫びました。

しばらくしいんとしましたので二人はも一度叫ぼうとして息をのみこんだとき森の中から

「凍み雪しんしん、堅雪かんかん。」と云いながら、キシリキシリ雪をふんで白い狐の子が出て来ました。

四郎は少しぎよつとしてかん子をうしろにかばって、しっかりと足をふんばって叫びました。

「狐こんこん白狐、お嫁ほしけりや、とってやろよ。」

すると狐がまだまるで小さいくせに銀の針のようなおひげをピンと一つひねって云いました。

「四郎はしんこ、かん子はんこ、おらはお嫁はいらないよ。」

四郎が笑つて云いました。

「狐こんこん、狐の子、お嫁がいらなきや餅もちやろか。」

すると狐の子も頭を二つ三つ振ふつて面白そうに云いました。

「四郎はしんこ、かん子はかんこ、黍の団子をおれやろか。」

かん子もあんまり面白いので四郎のうしろにかくれたままそつと歌いました。

「狐こんこん狐の子、狐の団子は兎うさぎのくそ。」

すると小狐紺三郎が笑つて云いました。

「いいえ、決してそんなことはありません。あなた方のような立派うさぎなお方が兎うさぎの茶色の団子なんか召めしあがるもんですか。私らは全体的ままで人をだますなんてあんまりむじつの罪をきせられて

いたのです。」

四郎がおどろいて尋ねました。

「そいじゃきつねが人をだますなんて偽かしら。」

紺三郎が熱心に云いました。

「偽ですとも。けだし最もひどい偽です。だまされたという人は大抵お酒に酔つたり、臆病でくるくるしたりした人です。」

面白いですよ。甚兵衛さんがこの前、月夜の晩私たちのお家の前に坐つて一晩じようるりをやりましたよ。私たちはみんな出て見たのです。」

四郎が叫びました。

「甚兵衛さんならじようるりじゃないや。きつと浪花ぶしだぜ。」

子狐紺三郎はなるほどという顔をして、

「ええ、そうかもしれません。とにかくお団子をおあがりなさい。私のさしあげるのは、ちゃんと私が畑を作つて播まいて草をとつて刈かつて叩たたいて粉にして練つてむしてお砂糖をかけたのです。いかがですか。一皿さしさしあげましょう。」

と云いました。

と四郎が笑つて、

「紺三郎さん、僕らは丁度いまね、お餅をたべて来たんだからおなかが減らないんだよ。この次におよばれしようか。」

子狐の紺三郎が嬉うれしがつてみじかい腕うでをばたばたして云いました。

「そうですか。そんなら今度幻燈会げんとうかいのときさしあげましょう。

幻燈会にはきつといらっしゃい。この次の雪の凍った月夜の晩です。八時からはじめますから、入場券をあげて置きましょう。何枚あげましょうか。」

「そんなら五枚お呉くれ。」と四郎が云いました。

「五枚ですか。あなた方が二枚にあとの三枚はどなたですか。」と紺三郎が云いました。

「兄さんたちだ。」と四郎が答えますと、

「兄さんたちは十一歳以下ですか。」と紺三郎が又尋ねました。

「いや小兄ちいにいさんは四年生だからね、八つの四つで十二歳。」と

四郎が云いました。

すると紺三郎は尤もつともらしく又おひげを一つひねって云いました。「それでは残念ですが兄さんたちはお断わりです。あなた方だけいらつしやい。特別席をとって置きますから、面白いんですよ。幻燈は第一が『お酒をのむべからず。』これはあなたの村の太右衛門もんさんと、清作さんがお酒をのんでとうとう目がくらんで野原にあるへんてこなおまんじゅうや、おそばを喰たべようとした所です。私も写真の中にうつつています。第二が『わなに注意せよ。』これは私共のこん兵衛べえが野原でわなにかかったのを画かいたのです。絵です。写真ではありません。第三が『火を軽べつすべからず。』これは私共のこん助があなたのお家うちへ行って尻尾しっぽを焼いた景色です。ぜひおいで下さい。」

二人は悦よろこんでうなずきました。

狐きつねは可笑おかしそうに口を曲げて、キツクキツクトントンキツクキツクトントンと足ぶみをはじめてしつぽと頭を振ってしばらく考えていましたがやっと思いついたらしく、両手を振って調子をとりながら歌いはじめました。

「凍しみ雪しんこ、堅雪かんこ、

野原のまんじゅうはポツポツポ。

酔ってひよろひよろ太右衛門が、

去年、三十八、たべた。

凍み雪しんこ、堅雪かんこ、

野原のおそばはホツホツホ。

酔つてひよろひよろ清作が、

去年十三ばいたべた。」

四郎もかん子もすっかり釣つり込まれてもう狐と一緒にいっしょに踊おどつて
います。

キツク、キツク、トントン。キツク、キツク、トントン。キツク、キツク、キツク、キツク、トントントン。

四郎が歌いました。

「狐こんこん狐の子、去年狐のこん兵衛が、ひだりの足をわなに入れ、こんこんばたばたこんこん。」

かん子が歌いました。

「狐こんこん狐の子、去年狐のこん助が、焼いた魚を取るとして

おしりに火がつききやんきやんきやん。」「

キツク、キツク、トントン。キツク、キツク、キツク、トントン。キツク、キツク、キツク、キツク、トントントン。

そして三人は踊りながらだんだん林の中にはいつて行きました。赤い封ふうろう蠟細工のほおの木の芽が、風に吹ふかれてピツカリピツカリと光り、林の中の雪には藍あいろ色の木の影かげがいちめんあみ網あみになつて落ちて日光のあたる所には銀の百合ゆりが咲いたように見えました。

すると子狐紺三郎が云いました。

「鹿しかの子もよびましようか。鹿の子はそりや笛ふえがうまいんですよ。」

四郎とかん子とは手を叩いてよろこびました。そこで三人は一

緒に叫びました。

「堅雪かんこ、凍み雪しんこ、鹿しかの子あ嫁いほしいほしい。」
すると向うで、

「北風びいびい風三郎、西風どうどう又三郎」と細いいい声がありました。

狐の子の紺三郎がいかにもばかにしたように、口を尖とがらして云いました。

「あれは鹿の子です。あいつは臆病ですからとてもこつちへ来そうにありません。けれどもう一いっぺん遍叫んでみましようか。」
そこで三人は又叫びました。

「堅雪かんこ、凍み雪しんこ、しかの子あ嫁よめいほしい、ほしい。」

すると今度はずうつと遠くで風の音が笛の声か、又は鹿の子の歌かこんなように聞えました。

「北風びいびい、かんこかんこ

西風どうどう、どっこどっこ。」

狐きつねが又ひげをひねって云いました。

「雪が柔やわらかになるといけませんからもうお帰りなさい。今度月夜に雪が凍つたらきつとおいで下さい。さっきの幻燈をやりますから。」

そこで四郎とかん子とは

「堅雪かんこ、凍み雪しんこ。」と歌いながら銀の雪を渡つておうちへ帰りました。

「堅雪かんこ、凍み雪しんこ。」

雪^{ゆき}渡^{わた}り その二（狐小学校の幻燈会）

青白い大きな十五夜のお月様がしずかに氷^ひの上^{かみやま}山から登りま
した。

雪はチカチカ青く光り、そして今日も寒^{かん}水^{すい}石^{せき}のように堅^{かた}く凍^{こお}
りました。

四郎は狐の紺三郎との約^{やく}束^{そく}を思い出して妹のかん子にそつと
云いました。

「今夜狐の幻燈会なんだね。行こうか。」

するとかん子は、

「行きましよう。行きましよう。狐こんこん狐の子、こんこん狐の紺三郎。」とはねあがって高く叫さけんでしまいました。

すると二番目の兄さんの二郎が

「お前たちは狐のそこへ遊びに行くのかい。僕ぼくも行きたいな。」と云いました。

四郎は困こまってしまつて肩かたをすくめて云いいました。

「大兄おおにいさん。だつて、狐の幻燈会は十一歳までですよ、入場券に書いてあるんだもの。」

二郎が云いいました。

「どれ、ちよつとお見せ、ははあ、学校生徒の父兄にあらずして

十二歳以上の来賓らいひんは入場をお断わり申し候そろ、狐なんて仲々うまくやつてるね。僕はいけないんだね。仕方ないや。お前たち行くんならお餅もちを持って行っておやりよ。そら、この鏡餅がいいだろう。」

四郎とかん子はそこで小さな雪沓ゆきぐつをはいてお餅をかついで外に出ました。

兄弟の一郎二郎三郎は戸口に並ならんで立つて、

「行っておいで。大人の狐にあつたら急いで目をつぶるんだよ。そら僕ら囃はやしてやろうか。堅雪かんこ、凍しみ雪しんこ、狐の子あ嫁よめいほしいほしい。」と叫びました。

お月様は空に高く登り森は青白いけむりに包まれています。二

人はもうその森の入口に来ました。

すると胸にどんぐりのきしきしようをつけた白い小さな狐の子が立って居て云いました。

「今晚は。お早うございます。入場券はお持ちですか。」

「持っています。」二人はそれを出しました。

「さあ、どうぞあちらへ。」狐の子が尤もつともらしくからだを曲げて眼めをパチパチしながら林の奥おくを手で教えました。

林の中には月の光が青い棒を何本も斜ななめに投げ込んだように射さして居りました。その中のあき地に二人は来りました。

見るともう狐の学校生徒が沢たくさん山集くつて栗くりの皮をぶつつけ合ったりすもうをとったり殊ことにおかしいのは小さな小さな鼠ねずみ位の狐の

子が大きな子供の狐の肩車に乗ってお星様を取ろうとしているのです。

みんなの前の木の枝えだに白い一枚の敷布しきふがさがつていました。

不意にうしろで

「今晚は、よくおいででした。先日は失礼いたしました。」という声がしますので四郎とかん子とはびつくりして振り向いて見ると紺三郎です。

紺三郎なんかまるで立派な燕尾服えんびふくを着て水仙すいせんの花を胸につけてまっ白なはんけちでしきりにその尖とがったお口を拭ふいているのです。

四郎は一寸ちよつとお辞儀じぎをして云いました。

「この間は失敬。それから今晩はありがとう。このお餅をみなさんであがって下さい。」

狐の学校生徒はみんなこつちを見ています。

紺三郎は胸を一杯いっばいに張ってすまして餅を受け取りました。

「これはどうもおみやげを戴いたいて済みません。どうかごゆるりとなすって下さい。もうすぐ幻燈もはじまります。私は一寸失礼いたします。」

紺三郎はお餅を持って向うへ行きました。

狐の学校生徒は声をそろえて叫びました。

「堅雪かんこ、凍しみ雪しんこ、硬かたいお餅はかつたらこ、白いお餅はべつたらこ。」

幕の横に、

「寄贈きぞう、お餅沢山、人の四郎氏、人のかん子氏」と大きな札ふだが出ました。狐の生徒は悦よろこんで手をパチパチ叩たたきました。

その時ピーと笛ふえが鳴りました。

紺三郎がエヘンエヘンとせきばらいをしながら幕の横から出て来て丁寧ていねいにお辞儀をしました。みんなはしんとまりました。

「今夜は美しい天気です。お月様はまるで真珠しんじゆのお皿さらです。お星さまは野原の露つゆがキラキラ固つまったようです。さて只今ただいまから幻燈会をやります。みなさんは瞬またたやくしやみをしないで目をまろに開いて見ていて下さい。

それから今夜は大切な二人のお客さまがありますからどなたも

静かにしないといけません。決してそっちの方へ栗の皮を投げたりしてはなりません。開会の辞です。」

みんな悦んでパチパチ手を叩きました。そして四郎がかん子にそつと云いました。

「紺三郎さんはうまいんだね。」

笛がピーと鳴りました。

『お酒をのむべからず』大きな字が幕にうつりました。そしてそれが消えて写真がうつりました。一人のお酒に酔よった人間のおじいさんが何かおかしな円いものをつかんでいる景色です。

みんなは足ぶみをして歌いました。

キツクキツクトントンキツクキツクトントン

凍み雪しんこ、堅雪かんこ、

野原のまんじゅうはぽっぽっぽ

酔ってひよろひよろたえもん 太右衛門が

去年、三十八たべた。

キツクキツクキツクキツクトントントン

写真が消えました。四郎はそつとかん子に云いました。

「あの歌は紺三郎さんのだよ。」

別に写真がうつりました。一人のお酒に酔った若い者がほおの木の葉でこしらえたお椀わんのようなものに顔をつつこ込んで何か喰たべています。紺三郎が白い袴はかまをはいて向うで見ているけしきです。

みんなは足踏あしぶみをして歌いました。

キツクキツクトントン、キツクキツク、トントン、

凍み雪しんこ、堅雪かんこ、

野原のおそばはぽっぽっぽ、

酔ってひよろひよろ清作が

去年十三ばい喰べた。

キツク、キツク、キツク、キツク、トン、トン、トン。

写真が消えて一寸ちよつとやすみになりました。

可愛らしい狐かあいの女の子こが黍団子きびだんごをのせたお皿を二つ持つて来

ました。

四郎はすっかり弱ってしまいました。なぜってたった今太右衛門と清作との悪いものを知らないで喰べたのを見ているのですか

ら。

それに狐の学校生徒がみんなこつちを向いて「食うだろうか。ね。食うだろうか。」なんてひそひそ話し合っているのです。か
ん子はずかしくてお皿を手に持ったまま真っ赤になってしま
いました。すると四郎が決心して云いました。

「ね、喰べよう。お喰べよ。僕は紺三郎さんが僕らを欺すなんて
思わないよ。」そして二人は黍団子をみんな喰べました。そのお
いしいことは頬ほつぺたも落ちそうです。狐の学校生徒はもうあん
まり悦んでみんな踊りあがってしまいました。

キツクキツクトントン、キツクキツクトントン。

「ひるはカンカン日のひかり

よるはツンツン月あかり、
たとえばからだを、さかれても

狐の生徒はうそ云うな。」

キツク、キツクトントン、キツクキツクトントン。

「ひるはカンカン日のひかり

よるはツンツン月あかり

たとえばこごえて倒たおれても

狐の生徒はぬすまない。」

キツクキツクトントン、キツクキツクトントン。

「ひるはカンカン日のひかり

よるはツンツン月あかり

たとえばからだがちぎれても

狐の生徒はそねまない。」

キツクキツクトントン、キツクキツクトントン。

四郎もかん子もあんまり嬉うれしくて涙なみだがこぼれました。

笛がピーとなりました。

『わなを軽べつすべからず』と大きな字がうつりそれが消えて絵がうつりました。狐のこん兵衛べえがわなに左足をとられた景色です。

「狐こんこん狐の子、去年狐のこん兵衛が

左の足をわなに入れ、こんこんばたばた

こんこんこん。」

とみんなが歌いました。

四郎がそつとかん子に云いました。

「僕の作つた歌だねい。」

絵が消えて『火を軽べつすべからず』という字があらわれまして。それも消えて絵がうつりました。狐のこん助が焼いたお魚を取ろうとしてしつぽに火がついた所です。

狐の生徒がみな叫びました。

「狐こんこん狐の子。去年狐のこん助が

焼いた魚を取るとしておしりに火がつき

きやんきやんきやん。」

笛がピーと鳴り幕は明るくなつて紺三郎が又出て来て云いました。

「みなさん。今晚の幻燈はこれでおしまいです。今夜みなさんは深く心に留めなければならぬことがあります。それは狐のこしらえたものを賢いすこしも酔わない人間のお子さんが喰べて下すつたという事です。そこでみなさんはこれから、大人になってもうそをつかず人をそねまず私共狐の今迄いままでの悪い評判をすつかり無くしてしまふだろうと思います。閉会の辞です。」

狐の生徒はみんな感動して両手をあげたりワーツと立ちあがりました。そしてキラキラ涙をこぼしたのです。

紺三郎が二人の前に来て、丁寧におじぎをして云いました。

「それでは。さようなら。今夜のご恩は決して忘れません。」

二人もおじぎをしてうちの方へ帰りました。狐の生徒たちが追

いかけて来て二人のふところやくくしにどんぐりだの栗だの青びかりの石だのを入れて、

「そら、あげますよ。」 「そら、取って下さい。」 なんて云つて風の様に逃げ帰つて行きます。

紺三郎は笑つて見ていました。

二人は森を出て野原に行きました。

その青白い雪の野原のまん中で三人の黒い影が向うから来るのを見ました。それは迎いに来た兄さん達でした。

青空文庫情報

底本：「注文の多い料理店」新潮文庫、新潮社

1990（平成2）年5月25日発行

1997（平成9）年5月10日17刷

初出：「愛国婦人」

1921（大正10）年12月号、1922（大正11）年1月号

入力：土屋隆

校正：田中敬三

2006年3月22日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雪渡り

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>